審査の結果の要旨

氏名　川本　哲也

人が、標準的な意味で、生涯に亘ってどのようなパーソナリティの発達軌跡を辿る傾向があるのかということに関しては、既に相当数の研究知見が蓄積されてきている。一方で、無論、そこには広汎な個人差も認められる訳であるが、それがいかなる要因および機序によって規定されているのかについては、未だ十分に整合的な説明がなされてはいない。本論は、そうした研究の現況に対して、被影響性および生活史理論という進化心理学の視座を独自に導入し、種々のデータを精細に分析することを通して、パーソナリティ発達の時間的安定性と変化に関わる新たな説明の枠組みを構築することを企図したものである。

本論は7章構成となっている。まず、第1章でパーソナリティ発達に関わる心理学研究の概要が示され、それを受けて第2章でそこにおける問題点と課題が理論的に審らかにされた。その上で、第3章(研究1)では、日本人の青年期前半におけるパーソナリティ特性の安定性と変化にいかなる個人差が認められるかに関して、東京大学教育学部附属中等教育学校のアーカイブデータ(N = 3656)を用いた実証的検討が行われ、総じて年齢とともに神経症傾向が高まる一方で、外向性がやや低くなること、また変化の個人差の一部が生年(コホート)および性別によって説明されることが明らかにされた。続く第4章(研究2)では、同データ中の特に双生児サンプルを用いた行動遺伝学的分析が行われ、パーソナリティの相対的安定性にはより遺伝要因の、他方、絶対的変化量にはより環境要因の関与が認められる他、環境からの影響の受けやすさ(被影響性)に遺伝的基盤が存在する可能性が示唆された。

第5章(研究3)では、一般成人(N = 1051)を対象とする2時点の短期縦断的なweb調査に基づき、生活史理論から導出された被影響性の個人差に関わる仮説の検討が行われた。結果として、ライフイベント経験によってパーソナリティに変化が生じ得ること、ただし、それからの影響の受けやすさ(被影響性)は、不安定な生活環境の中で成育してきた者においてほど大きい可能性が明らかとなった。さらに第6章(研究4)では、生活史理論との関連が深いアタッチメントの視点から、大学生(N = 1000)を対象に2 時点の短期縦断的なweb調査が行われ、対人関係における不安が高い者においてのみ，日常のネガティブな事象がパーソナリティに負方向の変化をもたらしやすいことが示された。第7章では4つの研究によって得られた知見の概要とその意義が記され、加えて今後の課題などが議論された。

発達過程の中の一時点において認められるパーソナリティの個人差に関しては、既に、遺伝と環境のいかなる要因がそこに関与し得るのかがほぼ特定されつつあると言える。しかし、複数時点に跨がって生じるパーソナリティの安定性と変化の個人差に関しては、未だ十分な解明がなされていない。本論の功績は、この安定性と変化の個人差について、被影響性と生活史理論という新たな概念枠を大胆に持ち込むことを通して、その機序の一端を明るみに出したところにあり、その豊かな着想力と先駆性には大いに瞠目すべきものがある。よって、本論文は博士(教育学)の学位にふさわしい水準にあるものと判断された。